論文の和文要旨

論文題目	モンゴル英雄民話研究
氏　　名	旦布爾加甫（ダムリンジャブ）（Damrinjab）

モンゴル口承文芸の収集、翻訳、出版の活動は、19 世紀の初めに始まった。このうち、民話の収集、出版の活動は、19 世紀の 70 年代に始まり、今日までに、モンゴル、中国、ロシア連邦とその他の国々で出版された民話の本は、300 冊以上になっている。これら 300 冊以上の本の中には、モンゴルの民話が 3 万編近くあり、そのうちの 200 編以上が英雄民話である。さらに、わたしは、1985 年から 1995 年の間に、オイラド・モンゴル人の居住する新疆の 20 数県で、22 ヶ月（660 日）間調査を行い、オイラド・モンゴル人の口承文芸、儀礼、オイラド方言に関する 1000 万字の貴重な資料を収集している。この原資料の中には、1000 編以上の民話、英雄叙事詩、民謡、祝詞、賛詞など口承文芸の多くのジャンルがあり、民話のうちの 97 編が英雄民話である。本論文は、これらモンゴル、中国、ロシアに居住するモンゴル人から収集された、あるいは出版された 300 編以上の英雄民話の原資料にもとづき執筆されたものである。

英雄民話は、モンゴル民衆の口承文芸において、韻文形式ではないことによって英雄叙事詩と区別され、魔法民話と呼ぶには魔法的要素の足りない民話で、主に英雄の行動について語られる。英雄民話は、魔法民話のように、主人公が望み、思い、願ったこと、あるいは出会った困難を、何らかの魔法の物体、超能力をもつ動物など、援助者の魔力、魔法で達成・克服するのではなく、自分の能力、勇気で勝ち取るところに特徴がある。口承文芸のこのジャンルを、その内容から見て英雄叙事詩にふくめる研究者もいるし、その形式から見て魔法民話、神話、伝説と呼ぶ研究者もいる。

また、その内容と形式の両方の特徴にもとづき、英雄民話と呼ぶ研究者もいる。だが、これに関して、あらゆる面から検討する総合的な研究は、これまでおこなわれてこなかった。この論文の目的は、モンゴルの口承文芸のなかに、その形式および内容において固有の特徴をもつ英雄民話というジャンルが存在することを、具体的に証明することにある。

モンゴル民話のジャンル分けについて、研究者たちは、さまざまな意見を提出してきたが、英雄民話に関して統一的な見解には達していない。アルタイ系言語を話す民族、とくにモンゴル民衆の民話において、英雄民話が特異な形式であることは明らかである。

例を挙げれば、わたしが行った 1985 年から 1995 年の間の口承文芸の収集活動で、新疆のオイラド・モンゴル人から採録した民話は、1000 編以上に及ぶが、その中で、英雄民話は 97 編ある。これは、全民話の 1 割を占めている。このように、民話の中で英雄民話が特異な形式であるのにもかかわらず、これについての研究は数えるほどしかなく、ほかの研究をする過程で触れただけのものを除けば、英雄民話を専論としてとりあげ、体系的に論じた研究は行われてこなかったと言える。

英雄民話は、モンゴル民衆の民話のひとつの形式である点において、民話分類の研究にとって重要であり、また、英雄叙事詩と起源の点で内的な関係があることから、英雄叙事詩の起源、発展の研究にとっても重要である。

本論文の構成は、研究の目的、方針から直接に導き出されたものであり、序論と 3 つの章、結論、

文献、付録によって構成されている。

序論では、この研究の重要性、研究の目的、研究状況、研究の主たる対象、研究方法、研究の独創性、理論的・実践的な意義、構成について述べた。

第 1 章「モンゴルにおける英雄民話、英雄叙事詩、その他の民話の相互関係」では、モンゴルの英雄民話と神話、伝説、魔法民話、英雄叙事詩との相関関係、それらの共通点と相違点を明確にして、モンゴル英雄民話の原資料にもとづき、その主題と内容の両面から分類した。

英雄民話という概念とその特性を理解するのには、英雄民話と魔法民話、英雄民話と神話、英雄民話と英雄叙事詩の関係が、当然重要となる。この 4 つには、類似する点が数多くあり、それによって、研究者や人々の中にこれらを混同する現象がかなり見られた。そのため、わたしは、これらの関係を明らかにし、英雄民話の概念と特性を解明し、モンゴル民話において英雄民話が独立したひとつのジャンルであることを、つぎのように証明した。

まず、英雄民話は、散文の形式をもつため、魔法民話、伝説、神話とかなり似ている。そのため、モンゴルの口承文芸研究者、P・ホルロー、D・ツェレンソドノム、D・ガーダンバらは、英雄民話を魔法民話と見てそう呼んで来た。その一方で、中国のモンゴル口承文芸の研究者のあるものは、英雄民話を神話、伝説と理解しそう呼んで来た。わたしは、この節で、これらの口承文芸のジャンルを研究する際に、単に内容だけから見たり、あるいは単に形式を取り上げるといった偏った扱いではなく、内容と形式を同様に等しく考慮し、英雄民話を、内容と形式の両面で、魔法民話、伝説、神話と比較研究し、それらの共通点と相違点を指摘し、英雄民話が民話における独立したひとつのジャンルであることを証明した。

つぎに、英雄民話は内容の面で、英雄叙事詩と非常に似ている。それゆえ、モンゴル叙事詩を研究したモンゴル、中国、ロシア、ヨーロッパの多くの研究者は、英雄民話を英雄叙事詩と理解しそう呼んできた。わたしは、この節で、モンゴルの英雄民話を英雄叙事詩と、内容･形式の両面だけでなく、この２つの芸術的表現形式、楽器の役割、演唱形式、構成、儀礼･信仰的性質、専門技能の性質、分布、範囲と規模、いくつかの話の特徴など 15 の要素について、2 つのジャンルの相互の関係を調べ、モンゴル英雄民話が英雄叙事詩ではなく、英雄民話がモンゴル民話における独立したひとつのジャンルであることを証明した。

また、わたしは、モンゴル、中国、ロシア連邦カルムィク共和国およびブリヤート共和国のモンゴル人から収集された 300 編以上の英雄民話の原資料にもとづき、英雄民話を、その内容、主題の対象範囲、長さ、構成により考察した結果、英雄民話が、形式において、単体の筋の英雄民話と、複合（複数）の筋の英雄民話という基本的に二つの形式に分類できることを指摘した。単体の筋の英雄民話は、その内容によってつぎのように分類される。① 婚姻の筋をもつ英雄民話（A）、②戦いの筋をもつ英雄民話（B）、③兄弟（義兄弟）になる主題をもつ英雄民話（C）、④兄弟、親族のあいだの復讐の主題をもつ英雄民話（D）の 4 つである。この 4 つの基本型を土台にして、嫁取りしてさらにまた嫁取りする、嫁取りしてから戦う、戦いの後さらにまた戦うなどなど 21 種類の複合の筋の英雄民話が発生したと考えた。これを以下に表に示す。

単体の筋を持つ英雄民話

1	2	3	4
A	**B**	**C**	**D**

複合の筋をもつ英雄民話

1	A+A1	8	D+B	15	D+A+A1
2	A+B	9	A+A1+B	16	D+B+A
3	A+D	10	A+B+A1	17	A+B+B1+A
4	B+A	11	A+B+B1	18	A+B+D+B1
5	B+B1	12	A+B+D	19	B+A+B1+B2
6	B+D	13	B+B1+A	20	B+A+B1+D+A1
7	D+A	14	B+B1+B2	21	B+B1+B2+B3+B4+B5

このように、英雄民話は、形式から考察すると、単体の筋を持つ英雄民話と、複合（複数）の筋を持つ英雄民話の 2 つの種類に分類でき、内容から考察すると、結婚の主題の英雄民話、戦いの主題の英雄民話、義兄弟になる主題の英雄民話、兄弟親族に復讐する主題の英雄民話というように、全部で 25 種類に分類できる。つまり、単体の筋を持つ英雄民話は基本の 4 つの種類に分類でき、複合（複数）の筋を持つ英雄民話は、この 4 つの種類の単体の筋の英雄民話をもとに発生したと考えられる。単体の筋を持つ英雄民話は、語り手に代々伝承され、何百年もの時間を経る過程で、あるものは単体の筋のままでのこり、あるものは、発展し変化して、複合の筋の形式をとるようになったと考えられる。

フィールド調査と分析の結果から見ると、モンゴル英雄民話の筋は、上述のとおり現在 25 種類であるが、その分布と伝承の過程においてバリアントを検討すると、つぎのことが言える。（1）いくつかの英雄民話は、英雄叙事詩より以前に発生し、しだいに英雄叙事詩になった。その理由は、太古の人類の言語は高度に発達していなかったために、何千行にもわたる叙事詩作品が創作される条件はなかった。叙事詩は、人類の言語の表現手段、芸術的心性が高度に発達した時点で、はじめて創作されるようになったのである。散文の作品が韻文の作品に発展することはよくあることだ。例えば、『ゲセル』は、チベットからモンゴルに伝わった時点では散文作品であったが、ブリヤート・モンゴルに広がったときには、その生活、芸術的心性、口承文芸の伝統などに影響され、長大な韻文作品となり英雄叙事詩の古典的形式を獲得したのである。（2）いくつかの英雄民話は、英雄叙事詩と同時に発生した可能性がある。（3）いくつかの英雄民話は、英雄叙事詩から変化した。その理由は、語り手の技能によって、英雄叙事詩が英雄民話に変化しうるからである。オイラドの叙事詩は、主として、専門の叙事詩の語り手が語る。専門の語り手でない者が、専門の叙事詩の語り手の語った叙事詩を、全部韻文形式のまま、完全に記憶することは出来ない。しかし、物語の筋はほぼ記憶できるので、散文形式で語られる過程で、英雄叙事詩が英雄民話に変化するのである。

第 2 章「モンゴル英雄民話の文化的内包」では、モンゴル英雄民話に反映された社会状況、古代の儀礼、神話的心性について考察した。

モンゴルの英雄民話や英雄叙事詩の中の古代の神話、儀礼のさまざまな要素には、人類の非常に古い時代の儀礼、思想、信仰の諸概念が現れている。このことは、英雄民話の起源、発達を研究する上で重要である。

モンゴル英雄民話に反映した神話的心性について、この節では、モンゴル英雄民話や英雄叙事詩の中にいつも登場する、主人公の木や花からの誕生、光や虹を放っての誕生の話を、モンゴルの非常に古い神話と関係づけて考察した。モンゴル人の間では、この世界ができる時、太陽や月はなく、人は人から生まれず、木や花から生まれる、また人の体から光が発し、闇を照らしており、人は木や花の果実を食べて生きていたとされる。その後、人の体の光が弱くなり、人を生んだ天の神様が、太陽と月を創造したと語られる。モンゴルの多くのエスニック集団の起源説話では、自分たちが木

や花からあるいは動物から発生したとする話が非常に多い。

つぎの節では、モンゴルの英雄民話における、「黄色い太陽に礼拝しくるぶしと大腿骨をつかむ」婚姻儀礼、「義兄弟になる儀礼」、骨と血の象徴、右側を尊ぶことの象徴的意味が出てくるモンゴル英雄民話の話を、モンゴル系の多くの集団の習慣、シャマニズム、考古学の資料、その他の研究資料と比較研究した。

最後の節では、モンゴル英雄民話に反映した社会状況についての問題を考察した。この節では、モンゴル英雄民話は、モンゴル英雄叙事詩と同じく、主にモンゴルの古代の氏族制社会の状況を反映していると考えた。具体的には、英雄民話に登場する戦いは、主に氏族間の初期の闘争、血の復讐の習慣、氏族間の同盟などを反映していると考えた。また、英雄民話に出てくる婚姻儀礼は、主に氏族における外婚制の時代の姻戚関係を反映していると考えた。具体的には、兄弟親族間の復讐の主題をもつ英雄民話のあるグループは、非常に古い時代の外婚制を反映しているが、ほかのグループは近年の家族内の矛盾を表現していると考えた。

第 3 章「モンゴル英雄民話における太古の信仰」では、太古の信仰とモンゴル英雄民話との関係についての問題を考察した。この章では、英雄民話が、古代モンゴル人の信仰の古い諸形式、つまり、女性器崇拝、山岳崇拝、火の崇拝、岩石崇拝、霊魂崇拝の概念をいかに反映し、これらが英雄民話の内容といかに結びついて、顕著な体系を生じさせているかを分析した。

整理すると、第 1 章では、おもに英雄民話の内容･形式の特徴を明らかにし、英雄民話、英雄叙事詩、魔法民話、神話、伝説の内的な関係、これら相互の共通点と特異点を解明し、英雄民話が独立したひとつのジャンルであることを証明しようとしたのに対して、第 2･3 章では、英雄民話に反映したモンゴル古代の儀礼、信仰、神話など文化の深層の内容が、モンゴル英雄民話にいかに現れているかを研究した。

結論では、論文の最後における研究の結果を述べた。また、論文の末尾に、参照した文献リスト、付録を添付した。

本論文は、中国新疆ウイグル自治区、甘粛省、青海省、内モンゴル自治区のアラシャー盟、モンゴル国のホブド、バヤンウルギー、オブス、フブスグルの各県、またロシア連邦のカルムィク・タンガチ共和国に居住する、トルゴード、ウールド、ホショード、ドゥルブド、バヤド、オリアンハイ、ザハチン、ホトゴイド、ミャンガドなどのオイラド人と、モンゴルのハルハ、ダルハド、ブリヤート人、内モンゴルのオルドス、バルガ、ブリヤート、オラド、ツァハル、ウゼムチンなどの人々から収集した、あるいは既刊の英雄民話 300 編以上の資料にもとづき、執筆された。本論文は、英雄民話というジャンルを、研究史上初めて専論として扱い、その特質を確定し、モンゴル人の民話においてひとつの独立したジャンルであることを、研究によって導き出された根拠、実際の資料に依拠して証明しようとしたものである。また、英雄民話を全体としてあつかい、その起源、発展、進化、形式・内容の特徴を明らかにし、英雄民話、英雄叙事詩、神話、伝説、魔法民話の内的な関係、これら相互の共通点と特異点を解明することにつとめた。また、モンゴル英雄民話に、古代の神話的心性、モンゴル人の儀礼、古代の信仰、とくに山岳崇拝、岩石崇拝、火の崇拝、女性器崇拝、霊魂概念がいかに反映し、英雄民話の内容の体系をいかに構成しているかを解明することを目標とした。